高木市之助著

国文学五十年

岩波新書

618

高木市之助著

国文学五十年

618

高木市之助

1888年愛知県に生まれる
1912年東京帝国大学文科大学文学科卒業(国文学専攻)
専攻—古代日本文学,民謡,一般文学論
著書—「吉野の鮎」「古文芸の論」「湖畔」「日本文学の環境」「万葉集」「平家物語」「近世和歌集」(以上3点「古典文学大系」,共著)

国文学五十年　　岩波新書(青版) 618

1967年1月20日　第1刷発行 ©
1967年4月20日　第2刷発行

著者　高木市之助(たかぎいちのすけ)

東京都千代田区神田一ツ橋2—3
発行者　岩波雄二郎

東京都新宿区改代町24
印刷者　田中昭三

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2—3　株式会社 岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします　　理想社印刷・田中製本

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

I　父の時代から子の時代へ……1
II　国文学の芽……17
III　アカデミズムのなかへ　一……43
IV　アカデミズムのなかへ　二……65
V　修養時代……87
VI　浦高時代からヨーロッパ留学へ……109
VII　大学教授時代……131
VIII　終戦をはさんで……153
IX　国文学の行くえ……181
あとがき

I　父の時代から子の時代へ

国文学の五十年を語れという御注文ですが、その五十年という区切りは、国文学にとってなかなか意味深いことのように思われます。というのは、国文学という名の学問は、考えてみると随分変な学問でね、この学問がとにかく世間で通用するようになったのは明治末期で、それが一人前に成長し、やがて時運に乗じて繁栄はしたものの、一方学問の世界でも、また社会的にもいろいろ批判されて、自分自身をきびしく反省するようになり、何とかしなくてはならないと自覚しはじめたのがまあ戦前と、大まかに見当をつけられましょう。すると、ざっと二十世紀の始まりからその前半を終る頃までが国文学の一生になる。一生といっても、この学問がこれで終ってしまうというのでは必ずしもない。ないどころか国文学という名の学問の中には何かしら別のものに新生されなければならないものが自覚されてきたように考えられる。私の

一生も大体国文学の一生に重なり合うことになりますが、だからといって、私がその国文学五十年の誠に短命な一生涯を語るに最もふさわしいかどうかはわかりませんよ。同じ五十年をその渦中でアップアップ泳いできた者はむしろ最不適任者だともいえますから。ただ、いや応なしに国文学者という名を冠せられてきた人間が、自伝風に国文学とのつながりを語ることは、国文学五十年を考えたり、もっと広く、そうした学問が通用した時代を認識するための一資料として案外役立つかも知れない。そういう意味で私のちっぽけな体験を話させて下さい。

いろいろの資料を蒐集整理して、五十年間に国文学の世界で誰がどんな仕事をし、どんな論争がどんな結果に終ったかなどということをとりまとめることも必要ですが、それは国文学五十年の歴史ではあっても一人の男の体験にはならない。私が話したいのは、そうした多数人によっても編集出来る年表や辞典ではなくて、そうした年表的辞書的な事実を受容しつつ、この一人の男がどのように生きてきたかといった自伝的体験についてである。ちっぽけで平凡極まるが、一方この男以外の誰にも書けない強味もある。それが自叙伝なわけです。

私は明治二十一年(一八八八年)に名古屋の池田町という今でも中区に現存する町の母方の里の下屋敷(しもやしき)で生まれた。父も母も没落士族の典型的一族で本宅などとっくに売り払って、下屋敷が町はずれに残っていたのです。池田町という町は古記録に宝暦六年(一七五六年)に町家とす

とあるから、古くから市街に編入されていたらしいが、このかいわいはその後特別に発展もしませんでした。私の生家は生け垣をめぐらした町角の家で、いろんな記憶が断片的に残っていますが、例えば盆踊りに、近所の若い衆達が手拭を頬かぶりにして、数名ずつ町を踊り歩く、それを生け垣のすき間からのぞく月夜の光景なんか七十年経ってもまざまざとイメージが浮かぶ。これは後年文献によった知識だが、俳諧の暁台（きょうたい）や也有（やゆう）の住んでいたところも池田町からそんなに遠くはなかったんです。でも私の国文学はこんな環境とは全く無関係です。

私と国学の縁についてもよく人から聞かれます。尾州藩には宣長の門人が沢山いて、国学は一藩を風靡していたからね。しかしこれも無関係です。かと思うと私のことを国学者らしくない国文学者だと、ほめてるのか非難しているのか知らないが言って下さる方もある。中にはまた私には何かしら「弁証法」的なところがあるなどと気にする方もあったりする。弁証法はオーバーだが、私の方法を強いていうなら、原初的な弁証法というくらいのことは言えそうです。唯物論的でもあり観念論的でもあり、またそのどちらでもなかったりしてね。案外それが人間の本来の思考のあり方じゃないですか。

こういう私の考え方、つまり二つのものを対立させ相反的に考えて行く思考法は一体どこから来ているのかとよく人に聞かれます。いつだったかも、石母田正さんと酒を飲んだときに、

「ぼく(石母田)は一体あなたの考え方を何がそのようにさせたかということを考えているがわからない。あなたは独り子で何の苦労もなく育ってきたらしい、それだのに妙に反骨的なところがあるが、誰か大学の先生であなたをいじめたり、あなたがつっかかって行った経験があるんじゃないですか」といわれたことがある。その時はいや別にそんなことはないですよと答えたけれど、後でそれが気になっていろいろ考えてみると、やっぱり私の父の反抗の伝承というか、ちょうど忠臣蔵で浅野内匠頭の恨みを大石内蔵助達がはらそうとして四十七士というグループをまとめたと同じようなものがあるんじゃないかという気がしないでもない。

父は明治十九年に東大の古典講習科というのを出ているんです。安政二年(一八五五年)に名古屋に生まれたんですから、明治維新の頃は十四、五歳位でしょうか。何でも若党を連れて、もちろん大小を腰にして京都へ行った話をよくしたことを覚えている。今になってみると生前に――大正十一年になくなりましたが――もっと聞いておくんだったが、なにしろ父がよく昔話をした頃はこっちが興味を持たなかったし、こっちが興味を持ち出した頃には父の方が黙々として殆ど何も語らなくなっていてね。何のために京都へ出かけたのか。一体幕末の各藩の動きは尊王と倒幕、攘夷と開国をめぐってどこでも複雑にこんがらかっていたらしいが、中でも尾州藩はいわゆる御三家として幕府の代表的親藩であった一方、国学が藩の教養層へ深く浸透

していた関係もあって、去就硬軟と両意見が対立していたが、幸か不幸か、父は当時――といっても正確には私にもわからないが――全くの少年だからその辺の自覚があってでないことは明らかです。わずかに、当時聞かされた私の記憶からわかることは、父のこの入洛がなんら動乱的な興奮も伴わず、かといって向学心につながる意欲からでもなかったらしいので、当時の父がまだ少年期の幼さから自発的というか自意識でというか、そうした藩の動きには直接加わり得ず、かといってそれに反撥もしなかったのだろうが、生来の体験としては或る程度維新という時代を受け取っていたといえはしないでしょうか。

父は随分晩婚でしたが、少年時代から結婚時代までのことも具体的には一向判然としていないんです。実はこの期間が父の人間形成の一番大切な時期かも知れませんが。私が直接父から聞いた話としては――少なくとも記憶している話としては――父は郡上(ぐじょう)八幡の小学校長をしていたらしい。それも何年頃かわからないが。これは私にとって父の成人期を推察する上にかなり重要な鍵になる。元来六郎という父の呼名でもわかるように、父は高木家の嗣子などではない、いわゆる部屋住みの居候格で、長男の任邦(ただくに)というのが後を嗣いでいました。なにしろ廃藩置県になって士族の生活は収入の途が、杜絶はしなかったが大変苦しいものではあったらしい。尾州藩などでは殿様が県知事に居直ってはいても、時々辞職願を出しては中央からその儀に及

ばずと却下される始末だから、旧藩士のために生活保障の途を講ずるなどといった実力はない。もっとも尾張藩は維新の際、紆余曲折はあっても結局親藩のくせに勤皇のために尽したおかげで、中央政府の見込みは悪くなかったようで、西南の役などにも出兵に応じ負傷者を出したりしている。それにしても収入はいっせいに約一割に減じたという記録があります――一割減ではなく九割減です。――そこへ抜目のない商人にたかられるのだからたまったものではない。ただ当時の藩主は士族救済にはいろいろ手を尽したらしく、その一つが北海道移民なのです。「三世紀事略」という、慶勝以下三代藩主の事蹟を史料によって編纂した本によると、明治十一年に藩主は開拓使長官に請願書を出している。

愛知県士族旧名古屋藩士之内往々貧困に迫り活計相立兼候者も有之趣に候処故旧の情誼傍観に忍びざる儀に付右の内有志の輩へ些少の資金を貸与し北海道へ移住就産営業為致度、付ては御管下胆振国山越郡山越内村字有楽府に於て草菜地立木を併せ別紙略図朱囲の通百五十万坪無代価御渡被下度云々

というのであって、伯父の任邦は早速この計画に応じて北海道へ渡ったが、元来労働に不慣れな上に血の気の多い典型的旧士族だった彼は間もなく名古屋へ舞い戻ってしまったらしいが、私は父からこうした移民の経験談など聞かされた記憶はなく、一方とんでもない岐阜県の山奥の小学校長になったりしているところを見ると、父なりの志望を堅持し、貧困な祖父の家に居

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

候に甘んじながら、あわよくば本場の東京へ出て勉強しようと機会をねらっていたらしい。

ところで一方明治四年五月に藩主徳川慶勝は中央政府へ向かって五ヵ条の献言をしているが、その第一条に「各地方学校の制を一にす」というのがあって、これに対して七月「(上略)朕之を嘉みす、将に施設する所あらんとす」ということが天皇の名によって伝達されている。こうして明治五年に施行せられたのが、全国的な小学校令であってみれば、具体的な人事については献言者としての慶勝公の推薦力は大きく物をいったであろうし、それが同時に旧藩士の生活を救う一方策だったことも考えられる。明治五年に父は十八歳だった勘定だが、今日の常識から十八歳の校長は考えられなくても、当時の政治の指導者達の若さからいえばそれも決して有り得ない話でもない。まして父が赴任した年代はわからないのだから、もっと繰り下げることもできるでしょう。仮りに明治十二年、つまり長兄が北海道入りをした年ぐらいに想像すれば、父は二十五歳になっているわけだから。

当時の小学校長といえば相当威張れたもので、殊に名古屋から来た少壮(?)学者ともなれば美濃の山奥の代表的文化人として社会的地位も、村長に次ぐ席が宴会などでは与えられ、世間ずれのしないこの童貞青年をまごつかせたという意味のことを半ば得意そうに父が話したことをうろ覚えながら思い出す。一番残念なのは、郡上へ赴任するまでに父がどんな風に勉強して

いたかという事が全然わからないことだが、彼の後半生を知る、しかも独り息子としての私のイメージを描かせるなら、この没落階層の、しかも一方新機運に胸をふくらませていた少年を魅了するに足るような師表的人物は、当時名古屋にはいなかったのではないか。だからこそ校長という名にあこがれて郡上まで赴任したので、しかし行って見ると俗事ばかりたかってきて学問への郷愁が徒らにかき立てられる。やっぱり東京へ行って本格的な勉強をしなければと、晩学のことを気にしながら、郡上時代の多少の貯金でも懐にして上京へ踏み切ったのではなかったかナ。

ちょうどその頃東京大学に古典講習科という、後の選科にちょっと似たものが附設された。御承知のように東京大学は明治十年四月に法文理医の四学部を以て開設され、その文学部には史学哲学科、政治学科と和漢文学科があったんです。そこへ更に古典講習科が附置されたのは、一つには例の条約改正にからむ欧化主義に対立する民族主義的国粋思想のあらわれでもあったのでしょうし、また、古典講習科の入学年齢が満二十歳以上と決められていたところからみると、当時漸く普及し始めた新学制の恩恵を得られなかった好学の青年層を救う臨時的措置だったとも思われる。事実、それは明治十五年と十七年の二回募集しただけで、修業年限は四年、明治二十一年にはもう廃止になっています。私の父は第一回の国書課に入学したようです。国

書課のほかに漢書課があり、「歴朝ノ事実、制度ノ沿革、並ニ古今言辞ノ変遷ヲ弁明」するというのが、当時東大の和漢文学科教授だった小中村清矩の「古典講習科開業演説」に言うその設立趣旨だったから、そこでやる国書課の内容も大体見当がつくはずです。講師はみんな東京在住の権威筋で、父が噂した人だけでも、久米幹文、小中村清矩、佐佐木弘綱――これは伊勢の人だが当時は立派に東京に住みついていた――といった顔触れ。父はよくこれらの人々の講義ぶりを声色もどきで食後などに聞かせてくれたものだが、中でも一番上出来らしく想像されたのは、久米幹文の「大鏡」の一節で、花山院が無理に出家させられるところ――「など櫛は悪しくさせたまふ」という一句が不思議に私の耳の底にこびりついている。今でも真似ができるくらいです。発音は至って不明瞭で、テンポは朗読よりもずっと遅い。僅かに節みたいなものがついて快調だ。はっきり言えば、酔っぱらいのくだよりも老人の寝言の方に近い。父の態度も、先生をなつかしく思い出しているにしては少々おどけていました。聞いている中学生(?)の私だって、それをまじめにしんみりと聞き入るはずもない。また始まったぐらいに聞き流す。父もそれは承知の上です。半分おかしく半分感傷的になって、独語のように口ずさんでおりました。こんな先生達に対して聴講する学生達は一回生として三十名位いたらしいが、もちろん父に比べると五年も十年も若く、私が後に東京大学へ入学した明治末期にまだ現役で残

っていた人もあったほどです。国史の萩野由之教授、国文では関根正直講師など。佐佐木信綱先生もそうだが先生はとび離れて若かったようです。

父の多年の夢がこの古典講習科在学の東京生活で見事に実現されたわけです。多分父は少年時代に若党を従えて京都入りした時のように自信満々と上京したことと想像されます。自分には今部屋住み時代に身につけた学問(?)と校長商売で溜め込んだ貯え(?)がある。そして最高の学府(?)で天下の権威から、毛並のいい秀才達と机を並べて講義を聴き得るに至ったのだから。

ここまでは正になにのなにがし立志伝一席というところだが、その後がいけない。というのは、父が歩いて来たコースの前途には当然突き当らなくてはならぬ壁があったのを、田舎育ちで世間知らずの父は気がつかなかったのでしょう。考えてみると講義そのものは変らなくとも、それを受取る学生の間には東京の檜舞台と没落士族の独学の田舎者と、学資関係にしても余裕しゃくしゃくと脛をかじっている者となけなしの貯金帳からその日その日を食いつぶして行く者とでは天地の差があるし、それに年齢という克服できないもう一つの絶対的格差もある。父のクラスメートで私の恩師だった関根先生も後年私に「クラスの中でお父さんだけがずばぬけて年長だった」と語られたことがある。父にしてみれば卒業後ももう少し東京生活を続けて素

志を貫きたかったにちがいないが、実はこのようにどの条件もそれを許してはくれなかった。

それに現在なら就職の世話は先生がしてくれるはずなのだが、当時の古典科の先生にはそうした実力者はまず無かったといっていい。みんな一方の権威ではあったが、卒業生――それもこうした田舎者に東京の生活を保障するような実力者ではなかった。皮肉に言えば古典科が設置されたこと自身がこれらのいわば無形文化財の生活を支えるためでなかったとは保障できない。

もっとも、古典講習科の二回の卒業生の中でも、育ちもよく、頭もさえ、適当に縁故を持った人達は、大学の方へ吸収されたり、実作家として歌壇で活躍したり、マスコミにデビューしたりしたが、父は不幸にしてどの一つの資格も与えられなかった。意気ようようと東京へ出たこのドン・キホーテにとって、入学と同時に獲得したかに見えた幸福が、卒業と同時に剝ぎとられたのでは、またすごすごと名古屋へ舞い戻る外に途はなかったのでしょう。

けれども父のこの失意挫折はそのまま失業にはつながらないのです。その時分の父――まだ私の生まれる以前の、つまり父以前の父――は、この時自信や野心を根こそぎ引っこ抜かれはしたが、就職難には逢わずにすんだようです。というのは、当時の名古屋という田舎――今でも田舎だが――では、東京帰りという履歴は、戦前の〝洋行帰り〟に比べても遥かに偉く評価

されたものらしい。それは父が名古屋へ戻ると間もなく師範学校の先生として採用されたからです。もちろん当時先生不足のせいもあったと思われるが、六十万石の大藩がつぶれた廃墟に父クラスの学者ならいくらでも事欠かなかったにちがいない。それにもかかわらず、父が何の苦もなくこの全国にまだ数えるほどしか無かった師範学校の先生の座にありついたのは、やっぱり東京帰りという虚名が物を言ったせいでしょう。

私の自叙伝がやっと私の誕生に近づいたようです。私が生まれたのは、前にも言ったように、明治二十一年の二月だから、母がみごもったのは二十年の春となり、したがって結婚はいくら遅くてもそれ以前という勘定になる。母は伊東氏で名は千代。この母については父以上に話したいことが沢山あるが、「国文学五十年」とは縁がうすいから割愛しましょう。ただ私が両親にとって全くの独り子だったことだけは、私が大学を卒業し得たありがたい恩恵の一つとして終生感謝せずには措かないことで、もしそこに「国文学五十年」を語る資格が生まれたとすれば、これだけは父を含めて母のために言っておく責任があるのかも知れない。

でももう一つだけ話させて下さい。母の愛を独占した私はよく母におんぶされてぬくぬくとねんねこにくるまりつつ買い物のお伴をしたものです。こんな幸福が私の幾つまで続いたか記憶しているはずもないが、その或る日の光景だけはまざまざとイメージが残っている。たしか

それはとても寒い日暮れ時だった。母は背中の私をゆすぶりながら「大寒小さむ、猫の皮ひっかぶれ」とくりかえしうたった。寒風(多分伊吹おろしの)に向かって、さも幸福そうに母はうたいながら、にこにことして半ばふりむいてくれた。ねんねこの中の私はそんなに寒いとも感ぜずに、一緒にうたったり、笑ったりした。そして私の七十七年の生涯で一番幸福だったのはあの瞬間だったのではないかと思ったりするんです。後年の私の民謡研究なども案外あの子守唄につながっているかも知れず、とすれば母もまたこの「国文学五十年」とまんざら無関係でないかも知れませんね。

ところで、私の誕生は母親にはこのように幸福をもたらしたにしても、他方父から学問への意欲を奪ったものもまた、私の誕生ではなかったかと思われるのです。というのは、それからのおよそ十年が父の一生涯中一番無為退屈な時代だったからです。一つには東京の勉強で父が学問をあきらめたという事情もあるでしょうが、一方には自分に賭けた野望みたいなもの(これは純粋に学問的なとは言い切れまいが)をこの新生の坊やにすりかえはじめたのではないか。このことは父の一生を通じて考えると私にはよくわかる。だってこの無風帯の次に来る遍歴時代へ父がどうして入ったかということは、父が自身をあきらめて平凡に暮して行こうとして遍歴を始めたというだけではどうしても割り切れないものが残る。当時親子三人で自分の持ち家

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com